

# 岩手から世界へ羽ばたく 注目アスリート

盛岡広域スポーツコミッションが推進する、オリンピック選手  
の輩出を目指す「エイト・オリンピックズ・プロジェクト」。シ  
リーズ第3回目となる今回は女子サッカーとラグビーの有力  
選手を紹介。五輪への思いに迫る。

アルビレックス新潟レディースに所属  
する岩手町出身の中村楓は、サッカー日  
本女子代表でも活躍するセンターバック  
だ。今年3月に開催されたアルガルベ  
カップでは国際Aマッチ初出場を記録。  
計3試合でフル出場を果たした。

「1人全員が海外選手という経験はな  
かったので、初戦はイメージしにくい中  
での試合でした。課題もありましたけ

やるべきことをしっかりやる。  
その先に次の舞台が待っている。



中村楓 [なかもら・かえで]

1991年8月3日生まれ。岩手町出身。165cm、56kg。沼宮内サッカー少年団、盛岡セブ  
ラレディース、常盤木学園高校を経て、2010年に新潟医療福祉大学入学とともにアル  
ビレックス新潟レディース入団。15歳で年代別の日本女子代表に初選出され、今年のア  
ルガルベカップ予選リーグ第2節では国際Aマッチ初出場を果たした。

昨日の自分が勝負。  
昨日の自分を超える。



川崎清純 [かわさき・せいじゆん]

1999年6月17日生まれ。聖石町出身。191cm、97kg。盛岡工業3年。ラグビーをスター  
トしたのは高校1年から。その年の6月にセブンスのU-15日本代表に選出されると2年の夏  
には15人制のU-17日本代表入りも果たし、今年のフランス遠征にも参加した。ポジシ  
ョンはフルバックとウィング。

も期待が集まる。

「日本でのオリンピックというのは奇  
跡的なことだと思うので、出られたら素  
晴らしい経験になるでしょうし、支えて  
くれた人への恩返しになるのかなという  
思いもあります。ただ、今のチームでや  
るべきことをやっていかないとそこに立  
つこともないと思うので、まずは自分の  
今の状況を受け入れてさらにレベルアッ  
プしていきたいと思っています」

アルビレックス新潟レディースでは8  
年目を迎える中村。名実ともにチームの  
柱としての活躍、さらにはなでしこ  
JAPANの一員として世界で戦う姿に

2019年のワールドカップを控え、  
県内でも注目度が高まるラグビーにおい  
て、未来の日本代表候補として期待され  
るのが川崎清純だ。高校から競技をス  
タートさせたにもかかわらず、わずか2  
か月でセブンスの日本代表に選出。身長  
191センチメートルという恵まれた体  
格、そして際立ったアスリート能力を武  
器に、年代別の日本代表（15人制）にも  
名を連ねている。



# 川崎清純

中学までは野球少年として鳴らした川  
崎。ピッチャーやショートとして、その  
実力は高く評価され、県内の強豪私立高  
校から熱心な誘いが相次ぐほどだった。  
「ラグビーを選んだのは父と兄がやっ  
ていたこともありですけど、一番は父と  
知り合いだった小笠原常雄前監督からの  
誘いが決め手でした。『この人の指導を  
受けられれば将来が決まるな』と直感的  
に感じたんですね。すごく心に残るも  
のがありました」

父はプレーヤー引退後もラグビーに携  
わり、兄も日本代表候補として名を馳せ  
るラグーマンだが、盛岡工業高校でなけ

ど、自分の特徴を出せるシーンもあった  
ので、2戦目以降は少し落ち着いてでき  
たかなと思います」

今や日本を代表する一人となった彼女  
のサッカーの原点。それは沼宮内サッ  
カー少年団でプレーをしていた時期にあ  
る。少年団時代に対戦経験を持つ男性に  
話を聞くと、当時の彼女は手が付けられ  
ない「無双状態」にあったと教えてくれ  
た。

「あの頃はスピード勝負でしたね。徒  
競走やリレーは男子に交じってやっても  
1位だったり。本当にあの頃はサッカー  
が楽しくて楽しくて、心の底から純粋に  
サッカーを楽しめていました」

そう声を弾ませ振り返る彼女は6歳か  
らサッカーを始めた。父・司は日本リー  
グ時代の目立に所属し、引退後に沼宮内  
サッカー少年団監督を務め、現在はレノ  
ヴェンスオガサFCの代表兼監督として  
小中学生を指導。兄・翔も現在、女子サッ  
カーの名門・藤枝順心高校で指導に当  
たっている。当時、女子選手はほとんど  
いない時代ながら、サッカー一家に生ま  
れた彼女にとっては自然な道だった。

人生初とも言える挫折を味わったのは  
常盤木学園高校時代。名門中の名門には  
全国からトップレベルの選手が集結する  
中、中村は怪我也あり、高校1年生のと  
き、半年を棒に振った。

「高校はレベルが高くて、本当に別世  
界のようでした。怪我をしていたときは  
本当につらくて、一度だけ本当に辞めよ  
うとお母さんに電話したことがあります。  
『大丈夫だから。楓なりにやってみ  
たら？』と声をかけてもらって、背中を  
押しもらった記憶がありますね」

家族の後押し、チームメートの支えの  
中でサッカーを続けた中村は、なでしこ  
JAPANでの定位置奪取、そして29歳  
で迎える2020年の東京オリンピック  
れば、あるいは小笠原前監督でなければ  
ラグビーを始めることはなかったのかも  
しれない。彼のDNAは小笠原前監督と  
の運命的な巡り合わせを介して、兄の背  
中を追うように盛岡工業高校に導き、川  
崎をラグビーの世界へといざなってい  
く。

入学以来、ラグビーと接する濃密な高  
校生活を送っている川崎は、今年4月に  
U18日本代表のフランス遠征に参加し  
た。JAPANでの経験、また海外での  
試合については自身の中で収穫も大き  
かったようだ。

「フランスでの試合では通用した部分  
もあるんですけど、相手も自分より大き  
い選手ばかりなので、もつと体幹を鍛え  
ないと難しいなと感じました。  
JAPANのメンバーはみんなうまい  
し、関西とかの選手は自分のプレーでの  
アピールがすごく上手。選ばれたときに  
調子が悪ければ次はチームに呼んでもら  
えない、本当にサバイバルレースなので、  
自分としては基礎能力を上げることが、  
残りの大会で結果を出していくことが大  
事になると思います。練習はきついメ  
ニューもありますけど、嫌ではありませ  
ん。それを乗り越えられたら前の自分を  
超えることができるし、それが次の（大  
学での）ステージにもつながると思っ  
ています」

最後に日本代表、そしてオリンピック  
やワールドカップといった大舞台への思  
いを聞いた。  
「もちろん、そこへの憧れや夢はあり  
ます。でも、まずは大学に行って4年間  
やり切って、そこで通用して初めて次の  
ステップにいけるものだと思っていま  
す。スキップとかはなくて、一つ一つの  
積み重ねがそういう場所につながってい  
るんだと思います」